

庄内協同ファームだより

No.134 2011年5月号



発行/
〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338
tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140
http://www.shonaifarm.com

地震・津波で亡くなられた方、被害に遭われた方々には心から「冥福とお見舞い」を申し上げます。

2011年3月11日 突然の大きな揺れ、家族は外に出たが自分はずくテレビをつけた。震源地は三陸沖 大津波警報の報道 10メートルの津波・・・まさか・・・生家は仙台市若林区、海岸から数キロのところにある。テレビ実況の信じられない光景、夢なら・・・

津波で電気系統のトラブルによる原発事故の報道、燃料棒が露出・・・チェルノブイリの事が頭をよぎった。

翌日ようやく仙台市中心部に住む姉と連絡がとれた。姉のこの建物はあまり被害はなく電気・水道は回復(都市ガスはダメ)し、無事であるがほかの兄弟とまだ連絡が取れないとの事だった。

3月14日 取引先とも連絡がつき、15日にBDF燃料のワゴン車に水カソリン・灯油・米・もち・毛布・衣類・野菜・等々協力頂いた支援物資を積み込み仙台へ出発した。月山道を越え閑山峠を越え仙台へ向かった。交通量は少なく、開いているガソリンスタンドへの長蛇の車列が目についた。姉の家に最初に寄った。そは屋が本業だがガスが使えないので弁当を安価で提供していた。

次にあいこトブみやぎの本部に寄った。15日午前に電気・水道が復旧したとの事。ガソリンが二番喜ばれた。

次の七郷小学校(避難所)では体育館・各教室に大勢の人が避難していた。周囲は停電中だが中部電力の発電車で電気等ライフラインは大丈夫だった。日赤・学校の教師が中心に活動していたの印象的だった。野菜等は調理する体制がまだないとのことで断られたが毛布・衣類が喜ばれた。

生家は床下まで海水が来たが建物は被害をまぬがれ、地震当日は小学校に避難し、翌日から学校近くの親戚に世話になっていた。

その後、同行したA君の生家に行った。建物のガラス・二部壁の壊れはあったが、応急補修し内部もある程度片付けてあった。玄関先まで津波の痕跡があり仙台東部道路が防波堤の代わりなうて弱まって被害が少なかつたとの事であったが、周辺には小舟・冷蔵庫・木片等が散乱していた。立ち入り規制のある東部道路をくぐる景色は一変した。車・松の木・瓦礫が水の引かない水田に散乱していた。近くの住宅に残っているものの遠く松林がまばらに見えるだけでこの世の景色には見えなかつた。

その後、A君の知り合いが避難している陸上自衛隊霞の目駐屯地へいった。飲み物・食糧等手渡すつもりであったが、個人的なものは受け入れ出来ないとの事だった。ヘリコプターで救助された荒浜小学校の避難者が主で校舎の3階まで津波が来たとの事だった。上空を飛ぶヘリの音を後にして叔母の家に立ち寄った。自転車・オートバイの店をやっていて物は倒れたりしたが建物の被害はなかつた。生家の様子を話

したら、連絡が取れず心配していたとの事だった。周囲の街の様子は一部地震で倒壊している建物があったが、電気も復興し、店舗には生鮮の商品も並んでいた。

残った支援物資は、若林区役所に届けた。15日になってやっと、災害ボランティアの募集を始めたとのニュースが流れていた。

姉のところにも二度立ち寄って、状況を報告、兄弟、親戚の状況確認をした。まだ連絡が取れない親族が心配だった。

被災にあつた方々は今後どうするのだろうか、安否は・・・海水の引かない農地は・・・住む家は・・・原発の影響は・・・重い気持ちのまま、仙台を後にした。

3月25日 再び仙台へ あいこトブみやぎへの支援物資(米・もち・野菜・漬物・おこし・あられ)を中心に積み込んで行ってきた。燃料不足もある程度解消して、交通量もだいぶ多くなつてきた。前回立ち入り規制だった荒浜地区にもいつてきた。道路は車が通れるだけ片づけられていたが、集落周辺の農地には流された家屋車・コンバイン等が散乱し、一部また海水がたまってた。建物に被害の少なかつた人がやつと家の周囲の瓦礫を片付け始めたところだった。海側は住宅の痕跡があるだけだった。胸が締め付けられ苦しくなつた。心から「冥福をお祈りした。排水設備が壊れたため、津波の被害の無かつた農地でも水系の圃場では米を作らない事に決め、作付を被害の少なかつたところにお願ひすることにしたとの事だった。今後、いつになったら米が作れるようになるのか、原発事故の事も考えるところについていかならないとの事だった。

帰りに姉のところに立ち寄った。ガスはまだ復旧しては無く、豆炭・電気を利用して簡単な弁当等を提供していた。

ぜいたくは敵、電気・水・油の表示があつた。

叔母の嫁が津波で亡くなつた知らせを聞いた。叔母は無事だったが家は津波で流されてしまったとのことだった。二見外見上は被害のないように見えるマンションでもドアが閉まらなくなつたり、食べ物が入りにくくなつたりとの状況とのことだった。

大きな被害もなく、春の農作業が出来るありがたさを実感するとともに、被害に合われた方、原発で避難せざるをえない方々のことを思うと申し訳ない気持ちになつた。

それにして福島島の原発の状況が気にかかる。広瀬隆氏の「危険な話：チェルノブイリと日本の運命」眠らない話・刻々と迫り来る日本の大事故の本を読み返した。脱原発を唱えいまは亡き高木仁三郎氏の危惧が現実になつてしまつた。原発の二日も早い収束を強く望むとともに、復興に向けて共に頑張っていきたいと思います。

代表代理 小野寺喜作

生産者集会を終えて

安心農産物生産委員会 委員長 菅原孝明



例年になく雪解けの遅い中、3月16日に第11回生産者集会が行われました。当法人で総会に次ぐ生産者の集会です。米・枝豆・柿・干し柿・大麦・大豆部会・へちま・加工・野菜グループ・農産加工部の環境・生産振興方針を基にした、目的目標の反省と今年度の作付け計画をとりまとめ確認し、今年一年がんばって、食べてくださる方に安心安全な農産物を作ろうと確認し合う会です

昨年度は春の天候不順、特に台風並みの嵐による米の紙マルチの剥がれ被害は大きな痛手でした。そして夏の猛暑と農産物にとっては厳しい年でした。にもかかわらず有機栽培面積（無農薬・転有を含む）は庄内協同ファーム総作付面積の43.7%となり昨年比1.8%の増加となりました。環境活動において組合員の頑張りが現れています。がんばっていますが、これ以上の面積拡大の限界感を誰しも感じています。

消極的ですがこれ以上面積を減らさない為に早急な課題は害虫・除草対策 特に【身体に優しい有機栽培技術の確立】が急務です。

（週刊金曜日より）

今回の震災で痛感させられたのは、「米の大切さ」である。

炊き出しのおにぎりがなかったらどうなっていたらどうだろう。首都圏を中心に米の買い付け騒ぎがあったが、100万トンの政府備蓄米があったからこそ終息できた。長期保存でき、少量で多くの人の命を救うことのできる、「日本人は米さえあれば生き

ていける」といっても過言ではない。その命の食である米の自給率が、TPPにより30〜40%になったら日本の破滅である。大半を輸入米で賄うことになれば日本は「手足をもぎ取られたダルマ」になってしまう。日本人が作り日本で備蓄しているからこそ自由がきくのである。

震災に見舞われた方々に心よりお見舞い申し上げます。



◀ あいさつする五十嵐代表



◀ 生産行程管理責任者 野口吉男



第1部 認証の取り組みを説明する野口吉男



前期の反省、今期計画を熱心にメモを取る生産者



青年部と議論する菅原委員長



第2部 パネルディスカッション

今年の作付に向けて

米部会員 小野 寺 彰

品種「つや姫」は、昨年の異常高温下でも品質がよかつた為、引き合いもよく今後山形のブランド米として期待のできる米となっている。1月7日には、有機資材を取扱っている業者2社からお越しいただき、資材説明会が行われた。おいしい有機米栽培のポイントや、新しい資材の特徴や効果等のお話をいただき、大変勉強になる。毎年この会に参加すると、今年も百姓として「ガンバ」らねばと思う、恒例行事である。そして2月10日の合同記帳会に於いて、各自の作付計画を提出することとなる。記帳会では、有機農法についての情報交換、資材の使い方の方意見交換等もでき、楽しいひと時となる。

食べてくださる方々の笑顔を想い、安全、安心な食作りへむけ、異常気象や、災害が来ない事を祈りつつ、今年も一年がんばろうと思つ。



種子を温湯浸法する小野寺彰

今年は年明けからの大雪に見舞われ、除雪作業の大変な冬になった。1月下旬に、米部会では今年の作付に向けて、水田作付予定面積9,058aの品種の調整、うるち、もちの比率等の会議を行い、各生産者に理解と協力を求めた。新

石川研修感想

工藤 祐生

1月11日より12日と庄内協同ファームの若手青年部で石川県の株式会社ぶどうの木と株式会社六星へ視察研修に行つて参りました。両組織ともファームとは違った事業展開をしており、特に株式会社六星は元々はファームと似たような組織形態であり、問題を抱えていた事もあり、様々な事を考えさせられました。両組織の違いを一言で言うと、一方が経営者で、それに対してファームは職人集団のような印象を受けました。普段、なかなか知ることの出来ない他組織の事を知る



(株)ぶどうの木さんの事務所前にて



社長さんと昼食を囲みながら

ことにより、逆にファームの良い点も悪い点も改めて良く知ることが出来ました。車にて片道7~8時間の長旅でまさに弾丸視察研修旅行と言った感じで正直、肉体的には疲れましたが、大変中身の濃い視察研修が出来たと思います。

施設内にある
おむすびコーナー



(株)六星さんの運営する店舗施設

ヘンリー 徒然草

五十嵐 勇輝



春作業が始まった。そしてイタリアでは、セリエAのASローマが買収されるらしい。

かつて中田英寿も在籍した名門サッカークラブだ。

しかも、相手はアメリカの企業。セリエAのオーナーといえば首相からファイアまで、イタリアの錚々たる人物が名を連ねているが、外資がオーナーとなつては「真実の口」も開いた口がふさがらないことだろう。

ところで、そのアメリカの企業というのが「NESV」。半年前に、イングランドプレミアリーグのリヴァプールFCを買収した会社と同じである。リヴァプールFCの新オーナーJ・W



・ヘンリー氏は母国では、ボストンレッドソックスのオーナーとしても有名だ。彼は農家出身の投資家で、レバレッジ

経営」と呼ばれる手法をクラブ経営に応用し、限られた予算で「チーム」のパフォーマンスを最大化することに成功した。

レバレッジとは「テコ」、このことで、少ない自己資本で高い利益を生み出すのが「レバレッジ経営」だとか。「少ない自己資本で高い利益」を目指すと言えば我々農家も同じである。借入金や補助金を最大限に活用して、高額な設備投資にまわす。差し詰め、コンバインがアンディ・キヤロルでトラクタがルイス・スアレスか。

先日参加した、JAの機会操作講習会では、最新型のトラクタや田植え機、電動折りたたみ式の代かき機等も紹介された。これだけの機械が揃えば、作業効率的にも精神的にも格段に良くなるに違いない。大型農業機械は現代農業において必要不可欠だ。しかし、そうでない機械や機能もあり、有効活用できなけ

れば経営を圧迫する危険もある。

「損して得とれ。」

ヘンリーオーナーならばこう言うだろうか。或いは得をしてから損をするのも悪くないが、何れにしても田植えが終わる頃には、海の向こうでは結果が出ているだろう。

団塊世代の仲間を失ってしまった。

2月2日 原田仁太郎さんが還らぬ人となった。水泳・スキーとスポーツ万能だった彼が育てていたのは果樹でした。祖父の植樹した柿の木は70年以上にもなるという三代続く柿畑、試行錯誤で減農薬栽培へも挑戦した。柿・干し柿を食べれなくなると思うと残念でならない。

計報

ブルーベリーも減農薬栽培で取り組んでいた。十数種類の品種を導入し、五百円玉くらいのものの収穫を本当に楽しみにしていたのに...

『オメも栽培してみねがー 苗木は作ってやる 二百本くらいでいーがー』そんなやりとりがあったことを思い出し後悔している。彼の育てた苗木は評判も良く生産をはじめて数年が経つ。研究熱心で独学で育てた苗木、彼が手がけた最後のものは大雪でつぶれたハウスの中で誰かを待っているのか?...

農産物のインターネット販売をはじめようとしていたことを後で知った。担当者との打ち合わせも終了し、今年から本格的にスタートする予定だったらしい。なじみの居酒屋の常連客の口コミで広がった商品の良さ、彼の人柄に集まる人々、これからはじまろうとしていたことがいっぱいあったはずなのに...。アラスカにオーロラを見に行く計画、韓国へのスキー旅行、苗木の販売、ネット販売と夢はいっぱいあったはず...

心よりご冥福をお祈りいたします。

合掌 佐藤和則

あとがき



夢であつたらどんなにいいかと空しい願いを抱きながら、一ヶ月が過ぎ去った。報道を見てすら胸つぶれる思いなのに、現地ですら立つ人の思いはいかばかりかと言葉もない。

けれど現実はその横たわり、乗り越えなければ前には進めない。生きる力を呼び戻し、希望の光が一日も早く見えてくることを共に祈りたい。

予想をはるかに超えた地震と大津波による被害は、地域の住民の意向を土台に、全世界の英知を集結して近い将来きつと復興できると、確信している。問題は原発だ。ひとたび事故が起きた時の被害の大きさと事態の深刻さは日々の報道で周知の通りだ。「直ちに健康に被害の出るレベルではない。」何度、この虚しい響きを聞いたことが。不安の抑制のみに執着する政府の説明はまるで説得力がなく、福島産の農畜産物は、食卓から遠ざかっている。同じ農民として心が痛む。自分の手の及ぶ範囲なら努力もできるし、頑張れる。けれど、今回のこの事故は頑張りようがない。

人の暮らしを豊かにする為の原発が、人の生きる力を根こそぎ奪ってしまうこの現実を、私達は思い知るべきだ。緑豊かな四季の移ろい美しい日本という国に、こんな不条理極まりないものを持つてしまった事を猛省すべき時なのだと思う。そして今度こそ原発なんかいらぬと声を大にして皆で叫ぼう。

(東)